ジョイフル コミュニケーション!
Salesian Bulletin Japan

ドン・ボスコの風

No. 20
April 2018

— 連載インタビュー ドン・ボスコの教え子たち —
城星学園中学校・高等学校教諭
日本ビルマ救援センター代表 **中尾 恵子さん**

— ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 —
ダラット／ベトナム社会主義共和国

— つながれ! サレジオ青年 SYM JAPAN —
SYM夏合宿 in 宮崎
第13回SYMの集い☆スペシャル ようこそ!チャーベス神父様

— サレジアンピープル —
“互いのために祈り、互いに仕え合うことが奇跡を起こします”
トム・ウズンナリル 神父

— サレジオ家族探訪 —
社会福祉法人カリタスの園 乳児院 つぼみの寮

特集
親子でスクールライフ!
～ドン・ボスコの“親心”が息づく学び舎～

Message from Fr. Provincial

こんにちは！マリオ神父です

共に、喜びながら成長できる学び舎

親（大人）にとって、子どもは喜びであり、生きがいでしょう。夢の実現の一つかもしれません。一方で、忍耐や犠牲も必要です。子どもも親も先生も、完璧な人などいなくて、それぞれの課題や問題を抱えているからです。

子育ては芸術的で、楽器を奏でるのに似ているように思います。私はギターを弾きますが、どんなに良い楽器でも必ず癖があるものです。でも、その癖を補い、いつくしみながら演奏することで、美しい音楽が生まれます。

子どもは、学校や地域の集団生活の中で、さまざまな違いを乗り越えて仲間と共に生きる体験を通して“よい社会人”へと成長していきます。親（大人）もまた、子どもと共に成長していく必要があります。私はアルゼンチンでサレジオの学校に通いましたが、私の両親も他の家庭の親たちも、学校の先生や教会の神父を訪ねて子育ての悩みを相談したり、親同士で助け合ったりしていました。

日本のドン・ボスコの学校・幼稚園・保育園・教会学校などでも、保護者の皆さんが教育活動のサポートやボランティア活動に熱心に取り組んでくださっています。ときには重荷になるかもしれませんが、家庭や職場とは異なる豊かな交わり・絆は、楽しみや夢につながって、きっと子どもが卒業しても続く“宝”になるでしょう。

ドン・ボスコの学び舎は、子どもたちとご家族の幸せのために、保護者や教職員も“共に、喜びながら成長できる学び舎”でありたいと願っています。

親（大人）は、いくつになっても子どものことを心配し、危機にある時こそ支え励ましたいと願い、幸せを祈る存在です。その“深い親心”をもって、ご一緒にドン・ボスコの“アシステンツァ”（共にいること）を実践してまいりましょう。

サレジオ会日本管区長

マリオ 山野内 倫昭 神父

2018年4月8日　神のいつくしみの主日に

まりお　やまのうち　みちあき

1955年大分県佐伯市生まれ、62歳。8歳の時、家族とアルゼンチンへ移住。29歳で司祭叙階。アルゼンチンの哲学院で哲学・社会学などを教え、司牧担当・院長・アルゼンチンとパラグアイ6管区の修練長を経て、1997年（41歳）帰国、日本のサレジオ会員として働く決意をする。育英高専・杉並支部院長、調布サレジオ神学院院長、副管区長・サレジオ家族担当・養成担当を務め、2014年12月より日本管区長。趣味はギター演奏。

2016年3月、カトリック浜松教会での復活祭でギター弾き語りを披露する山野内マリオ神父。浜松教会はさまざまな国籍の人びとと家族が集い、人生を分かち合う“大家族”だ。

ジョイフル コミュニケーション！

ドン・ボスコの風　Salesian Bulletin Japan　No.20　April 2018

Contents もくじ

4 特集 親子でスクールライフ！
～ドン・ボスコの“親心”が息づく学び舎～

子どもと共に歩き 共に成長していく　城星学園後援会

インタビュー　三世代でドン・ボスコの学び舎に

喜びや悩みを分かち合い 豊かな人生を歩む　サレジオ学院 父親聖書研究会

10 連載インタビュー　ドン・ボスコの教え子たち

城星学園中学校・高等学校教諭　日本ビルマ救援センター代表 中尾 恵子さん

12 ドン・ボスコのトモダチが暮らす街 Don Bosco Amici

ダラット／ベトナム社会主義共和国

14 （サレジアンピープル Salesian People）トム・ウズンナリル神父 /インド・バンガロール管区

“互いのために祈り、互いに仕え合うことが奇跡を起こします”

18 サレジオ家族探訪　Visit the Salesian Family

社会福祉法人 カリタスの園　乳児院 つぼみの寮　イエスのカリタス修道女会 宮崎県宮崎市吉村町

20 つながれ！サレジオ青年　SYM JAPAN　Salesian Youth Movement Japan

SYM夏合宿 in 宮崎

第13回SYMの集い☆スペシャル　ようこそ！チャーベス神父様

24 サレジアン スクールライフ！ レポート

30 Salesian Family member interview　ファミリーメンバーインタビュー

「今、私「○○」しています！」サレジオ会司祭　谷口 亮平 神父

「ようこそ日本へ！」ジェスウィン・マスタン 神学生／ジョセフ=アブト・アマディ 神学生

16 世界のサレジオ家族ニュース / 26 サレジオ家族 国内ニュース / 29 サレジオ情報募集

今号の表紙

親と子の夢は、苦労と長い時間をかけて一致し、受け継がれていく。神が一人ひとりにかける夢を私たちが悟り、その道を歩むように。写真は三世代50年以上にわたり城星学園と共に歩んできた家族。

ドン・ボスコとは？

「青少年の友」と呼ばれ、助けを必要とする若者たちのために生涯をささげた神父。1815年イタリア生まれ、名前はヨハネ（イタリア語でジョヴァンニ。ドン・ボスコは「ボスコ神父」の意味）。青少年教育に献身するサレジオ会を創立。1888年帰天。1934年列聖。

サレジオ家族とは？

ドン・ボスコの精神を受け継ぐ修道者・信徒・協力者たち。世界130以上の国で、31団体、40万人以上のメンバーが、学校、教会、社会生活のさまざまな場面で青少年や貧しい人びとのために奉仕している。サレジアンファミリーとも呼ばれる。

サレジアン・ダイアリー　vol.03

「愛するだけでは足りない…」

「…子どもたちが愛されていることがわかるように、愛さなければなりません。」職員みんなで、具体的にかつ足並みをそろえて実践できる方法はないだろうかと考え、まずは、深くて大きすぎる「愛」という言葉を「ほめる」という言葉に置き換えて、取り組みを始めた。あいさつなど当たり前のことも、子どもたちができた良い行いをほめて、ほめたら付箋に記入し、見えるところに掲示する。たまった付箋は、子どもたちにプレゼント。園全体に柔らかい空気が流れ、おもしろいことに、子どもたちも職員をほめてくれている。「○○ちゃん　ありがとうって言ってくれてありがとう☆」子どもたちに愛が通じることを期待して、また付箋が1枚追加!!

村松 泰隆 神父

むらまつ　やすたか

1969年生まれ。49歳。児童養護施設「聖ヨゼフ寮」副園長。ゴスペルマジシャン「ファーザーミッキー」としても活躍中。

子育ては、かけがえのない喜びであると同時に、
大きな忍耐を必要とする人生の大事業でもある。
ドン・ボスコの学校は、子どもと共に親も集い、学び、
成長できる“命と愛”の学び舎だ。
今回はドン・ボスコの“親心”が息づく
保護者の皆さんの活動を紹介したい。

● 取材・文／編集部

特集

親子でスクールライフ!

～ドン・ボスコの“親心”が息づく学び舎～

ドン・ボスコは身寄りのない青少年のために寄宿学校を始めた時、母マルゲリータを呼び寄せて、家庭的な教育環境を大切にしました。「家庭的な雰囲気」は、今や世界中に数千校あるサレジアンスクールの共通点といえます。

そんなドン・ボスコの“親心”に満ちた教育の秘訣（ひけつ）がちりばめられた手紙があります。1884年、晩年のドン・ボスコがトリノの寄宿学校（オラトリオ）にいる“息子たち”、つまり先生と生徒に宛てて書いた「ローマからの手紙」は、彼が見た夢を語るかたちで綴（つづ）られています。

長い手紙の中から、“親心”にあふれたドン・ボスコの言葉を紹介しましょう。

こころの教育者ドン・ボスコの
「ローマからの手紙」
ドン・ボスコ社より

Don Bosco's words 1

深い親心

近くにいても遠く離れていても、いつも君たちのことを思っています。わたしの望みは、ただ一つです――君たちがこの世でも永遠においても、いつも幸せであるように。

Don Bosco's words 2

伝わる愛 “アモレヴォレッツァ”

子どもたちを愛するだけでは足りません。子どもたちが、自分たちは愛されていると実感できなくてはなりません。

Don Bosco's words 3

共にいること “アシステンツァ”

子どもたちの好きなこと、子どもらしい望みに、大人も加わりましょう。子どもたちはこれを見て愛されているとわかり、例えば規律、勉強、自制心のなかにも愛を悟り、自発的に愛をもってそれを行えるようになるのです。

Don Bosco's words 4

親しみ、愛、信頼

親しみは愛を生み、愛は信頼を生みます。こうして若者たちは、心を開き、恐れることなく何でも打ち明けます。愛してくれる人をよく知っていて、その人が命じることなら何でも、喜んで従います。

Don Bosco's words 5

忍耐、謙遜、感謝

お互いの欠点を耐え忍ばなければなりません。完全さは、ただ天国にだけあるのです。神の恩恵のうちに毎日を過ごすようにしなさい。神との平和がない者は、自分自身とも、ほかの人たちとも平和がないからです。

多感な時期にある子どもと共にいるとき、ドン・ボスコの勧めを実践するのが困難な時もあるでしょう。しかし、ドン・ボスコの学び舎には、人生を分かち合い、励まし合いながら、共に学び、成長していくチャンスがあります。

**親子でスクールライフを
エンジョイしていますか?**

城星フェスタの様子

宗教部

テニス部

ソフトボール部

子どもと共に歩き 共に成長していく

城星学園後援会

城星学園（大阪府大阪市）は幼稚園・小学校・中学校・高等学校が同じ敷地にあるアットホームな学校だ。城星学園の特長の一つに、校種を超えて活発に活動する保護者会「城星学園後援会」がある。後援会本部（当時）の島千夏（しまちか）さんにお話を伺った。

城星学園との出会いは？

保護者として城星学園後援会本部の総務をしてきました。娘は幼稚園の年少から高校3年までの15年間、城星に通い、私もその間、母親として長くここに関わって、たくさんのシスターや先生方、保護者の皆さんとお付き合いさせていただきました。

私自身は別のキリスト教系の幼稚園を卒園したので、ここに来た時懐かしいなと思いました。幼い頃、愛されて育ったという記憶があるので、娘にも同じように体験してほしいと思い、城星学園幼稚園に娘を入園させました。実際、安心して娘を預けられ、大切に育てていただきました。園長シスターがいつも言われていた「愛するだけでは足りない、愛されていることがわかるように愛しなさい」という言葉が実践されていたのだと思います。

保護者はどんな活動を？

城星の特長の一つは、保護者による後援会がとても活発で、保護者と学校とのつながりが強いということです。特徴的なのは、後援会は幼・小・中・高の保護者がそれぞれ独立して活動するのではなく、校種を超えて集まっていることです。

後援会には、宗教部・手芸部・テニス部・ソフトボール部の4つの部があります。運動系の部には父親の参加も多く、講師やコーチを招いて指導していただき、活発に活動しています。これらの活動には後援会から補助金が出ます。

思い出すのは、娘の入園のとき、園長シスターから「座布団も、ランチョンマットも全部手作りでお願いします」と言われたのですが、私は針と糸をほとんど持ったことがありませんでした。どうしようと困っていたら、後援会の手芸部で教えていただき、とても助かりました。

サークル活動も盛んで、ランニングサークル、ゴルフサークルがあります。ランニングサークルは月に何度か集まってそれぞれのレベルに合わせて走っています。ゴルフサークルは、2017年度の大阪私立中学校高等学校保護者会連合会のゴルフ大会で、20チーム中6位でした。サークルにはOG・OBの参加もあり、年齢の幅があってとても賑やかです。

城星フェスタとは？

後援会主催の最大の行事は、11月第1日曜日に開催する「城星フェスタ」です。幼稚園児や小学生に楽しんでもらい、中高生は模擬店やゲームコーナーを担当します。保護者はそのバックアップをします。幼稚園から高校のクラス役員と希望者で毎年400人から500人近く保護者のボランティアが集まります。

城星フェスタは子どもたちのワンダーランド！

城星フェスタで大人気のふわふわ遊具

城星フェスタのパンフレット

城星フェスタでは幼・小・中・高そして後援会が一丸となって地域の方々をおもてなし

後援会本部はテント設営・警備・イベント関係・販売・総務・会計を担当し、ボランティアの保護者500人をそれぞれのブースに割り当てます。中高生による模擬店、シスターコーナー、制服リサイクル、生徒会による被災地支援コーナー、喫茶コーナー、抽選会、クラブ発表会や展示、ふわふわ遊具、プロの劇団による人形劇など盛りだくさんのイベントです。2017年度は子どもたちと保護者、それから地域の人など含め来場者は4000人でした。半年かけて準備し、子どもたちの安全面や衛生面などをきちんと考えて企画します。大勢の人を動員することで大変なこともありますが、毎年とてもプラスになることが多いです。すべては子どもたちに喜んでもらいたい、みんなで子どもたちのワンダーランドを作りたいという思いです。

参加してよかったことは？

城星は保護者どうしが集まる場や時間がたくさんあって、学校との関わりが深いところだと思います。学校と家庭が分断されないことは、子どもにとっても保護者にとっても安心があると思います。学校に来て先生と会い、保護者の諸先輩たちから学校の情報を教えてもらえたり、保護者どうしの情報交換もできたりしますので安心できます。

私自身、娘のことでちょっと不安があったりした時に、先輩のお母さんたちのアドバイスは助けになりました。自分の不安を話す場所があって、不安でなくなるので、娘に客観的にアドバイスすることができます。子どもは自分の世界が広がっていくごとに、子どもたちどうしでのいざこざが出てくるものですが、安心感があれば、子どもと一緒になって騒ぎ立てるとかせず、一歩引いて落ち着いて話をよく聞いてあげられると思います。

城星では保護者も学校生活をエンジョイしています。保護者が生き生きしている姿があると思います。この15年間、いろいろ苦労もありましたが、それより楽しかったという印象です。娘と一緒に歩いて幼稚園に行き帰りしたのを思い出します。娘は文字通り一歩ずつ歩きながら成長していったように、親の私も娘と一緒に歩きながら、さまざまなことを一緒に体験し、成長してきたのかなと思います。

学校から

親しみやすく、温かい伝統を大切に

城星学園中学校・高等学校校長　宮脇道子シスター

城星学園は保護者との連携をとても大切にしています。多くのご家庭が協力的です。ことが起こったときだけでなく、良いことも報告するようにして、さまざまな形で連携をとっています。ありがたいことに、卒業生が自分のお子さんを通してまた学校に帰ってくるというケースが結構あります。ここに入れたら大切にされるという安心感をもって送ってくださっているのかなと思います。

私たちはアシステンツァ、つまり「共にいること」を大切にしています。愛と信頼がなければ教育はできません。ドン・ボスコは「愛するだけでは足りない。子どもたちが愛されていると感じるまでに愛しなさい」と言いましたが、教員にできるだけ生徒と共にいること、関わることをお願いしています。実際、城星では先生と生徒がとても親しいという伝統があります。そういう温かい伝統が続くようにしていけたらと思います。

インタビュー

三世代でドン・ボスコの学び舎に

親・子・孫、三世代で50年以上も城星学園と共に歩んでいる「城星ファミリー」な家族にインタビュー！　アットホームで信頼できる城星学園のよき伝統は、時代を経てもしっかりと受け継がれている。

左から瀧川麻実さん（清子さんの次女、41期生）、津村歌織さん（清子さんの長女、29期生）、津村詩音さん（歌織さんの長女、59期生）、熊谷清子さん（4期生）

――城星学園に入ったきっかけは？

熊谷清子さん（以下、清子）　城星学園に通っている近所のお姉さん（1期生）が「どこ受験するの？城星いいよ」と勧めるので、「どんなところ？」と聞いたら「クリスマスには1人1個ずつケーキがもらえるよ。ぜひおいで」って（笑）。当時お祝いといえば鯛だったので、わくわくしました。後日見学に行って、シスターにお会いして優しさにふれ「この学校に行きたい」と思いました。隣接する大阪カテドラル聖マリア大聖堂も見学して、その美しさと壮大さにびっくりし、「絶対城星に行く！」とさらに入学への思いが高まり、頑張ろうと決意したことを覚えています。

津村歌織さん（以下、歌織）　私は幼稚園から14年間、城星に通いました。気がつけば自然にお祈りもし、聖歌も歌っていたという感じです。娘（詩音）が生まれると、おぼろげに城星に入学させたいと考えていました。転勤で東京にいましたが、娘が小6になった時に辞令が出て、卒業後は大阪に戻ることになったので、城星に娘を入学させることにしました。遠方受験で大変不安でしたが、母校の安心感と先生方のご対応のおかげで乗り切ることができました。

瀧川麻実さん（以下、麻実）　私は年の離れた姉や兄についていってたので、生まれた時からずっと城星に通っている感じです（笑）。〔兄の熊谷典之さんも小学校まで城星〕

――詩音さんは、オープンスクールで感激したとか。

津村詩音さん　オープンスクールではクッキング体験をしました。とても楽しくて、先生と先輩方もみんな優しく教えてくださいました。校舎も素敵で、城星に入りたいなと思いました。入学しても印象は全く変わらず、クラスは少人数で、先生とも日々おしゃべりできますし、毎日楽しく通っています。今は聖歌隊と理科部に入っています。聖歌隊ではあちこち出かけて歌ったり、理科部ではニッケルの電気メッキの実験をしたりします。夏は合宿もあります。とても充実した学校生活です。

歌織　最近では大阪星光学院との交流もあるようで、新たな風を感じます。他の学校の方々と接する機会も、私が在籍していた頃より増えているように感じています。

清子　孫が入学すると決まったとき、校歌を久しぶりにみんなで歌いました。自分自身まだ覚えていることにびっくりした次第です。

歌織　娘の入学式の時に嬉しかったのが、小3の時の担任の先生に会えたことです。びっくりしたのと同時に、懐かしさと嬉しさでウルウルしてしまいました。学生時代を思い出しつつ、私も再び城星に通っているという感じです。

清子　今も孫がこうして城星に入学し、行事に顔を出させて頂いたりして楽しみがあります。今も昔も変わらない城星の雰囲気を感じております。

――お子さんを母校に入れたいと思ったのは？

清子　大人になってから、城星で大切なことを教えて頂いたことに気づきました。感謝する心や、人への思いやりとか。もちろん家で子どもの教育はしなければなりませんが、学校での手助けは重要だと感じていましたので、子どもたちに教育を受けさせるなら、ぜひ城星でと思いました。

歌織　社会に出てから自分としては当たり前にしている行動もほめられることが多く、学校でも家庭でも心を育てられたと思います。

――城星学園の昔も今も変わらないところは？

歌織　生徒の雰囲気は変わらないですね。昔から素朴で穏やかな子が多いです。派手でもなく、地味でもなく、でも明るく朗らかな感じです。卒業後も仲良くしています。

麻実　先生と生徒の距離が近いです。アットホームという言葉が似合う学校です。今も城星には中高時代の先生がいらして、私のこともよく覚えてくださっているので、当時に戻って話している感覚です。だから、まだ私も城星から卒業できてないのかも（笑）。

喜びや悩みを分かち合い豊かな人生を歩む

サレジオ学院 父親聖書研究会

鳥越校長を囲んで、中学1年から高校3年の父親約150人による「父親聖書研究会」の皆さん

サレジオ学院中学校・高等学校（神奈川県横浜市）の文化祭で「親父の焼き鳥」を見事なチームワークで盛大に焼いているお父さんたち……じつは「父親聖書研究会」のメンバーだ。幹事団（56期・中学3年生の父親：当時）の皆さんにお話を伺った。

どんな会ですか？

父親聖書研究会は、聖書をもとに教育や家族や人生について共に考え、語り合う父親有志の会です。堅苦しい勉強の場ではなく、「サレジアンの父親」という同じ立場から、喜びや悩みを分かち合い、心身ともにより豊かな人生を歩むことをめざしています。中学1年から高校3年の父親約150人が参加していて、父親同士で年代や職業を超えた、部活動のような深い関係を築くことができます。

活動内容は？

毎月1回土曜日（年9回）に校長先生を講師に招いて、学校で定例会（聖書の講義）を開催しています。講義は約1時間で、「映画とキリスト教」や「他宗教とキリスト教」など毎年テーマも多彩です。学校や日常生活のエピソードも満載で、飽きさせない講義です。講義終了後は懇親会も楽しみの一つです。

定例会のほかにも研修合宿、サレジオ祭（親父の焼き鳥）、ソフトボール大会、クリスマスミサなどの行事を通して、会員間の交流を深めています。

参加したきっかけは？

- 学校では息子が勉強だけでなく、生き方の教育を受けています。その先生方から親も直接学べる環境がサレジオ学院にはあるので、ぜひ参加したいと思いました。
- 息子が受験する前にサレジオ祭を一緒に見学に来た時、「親父の焼き鳥」が大々的に活躍している様子を見て、子どもが通う学校に親も何か関われたらと思っていました。「聖書研究会」という名前に少しためらいましたが、参加してみると違った（笑）というか、親同士で学びながら親睦も深め合うことができて良かったと思っています。
- 我が家は無宗教ですが、私たち夫婦は仏教系の大学に、息子はプロテスタントの小学校に通っていました。カトリックはどんなことを教えているのか興味があって参加しました。
- 哲学や宗教に興味があり、神父様の講義を受けられるというので参加しました。本で得られる知識とは違って、日常生活に根ざしたハート・トゥ・ハートな話が聞けて、キリスト教をより深く理解できたような気がします。

参加してよかったことは？

- 父親の会を純粋に楽しんでいます。子育てについて、お父さんたちと情報交換できるのがよかったと思います。
- 父親どうしの連帯感と親近感ができます。休日に（幹事団はほぼ毎週）集まるのも、楽しいので通っています。中学生の入学式で保護者の皆さんに「父親の皆さんも一緒に学んで、学校生活をエンジョイしましょう！」と勧誘しています。
- 父親の会の話題がきっかけで、子どもだけでなく妻との会話も増えました。聖書研究会で学んだことを家族で分かち合えるのはとてもよいと思います。
- 父親の会に入って、だいぶ子離れできたように思います。他のお父さんの話を聞くことで、あまり心配しすぎなくなりました。先生たちが「安心して任せてください」と言ってくださったおかげもあります。反抗気味だった息子が、逆に歩み寄って話しかけてくるようになりました。
- 息子が学校の話を聞いても「別に、普通」といった返事しかなかったのですが、父親の会で学校の話題を知ることができて、質問攻めにすることなく子どもと自然に会話できるきっかけが増えました。今は反抗期でも、父親が自分や学校のことに関心を持って少し離れたところから見守っているという安心感を、息子はわかってくれていると思います。

サレジオ学院の保護者グループは、保護者会、母親聖書研究会、卒業生保護者による「きじの会」（母親）と「竹の会」（父親）、キルト、コーラスなどのグループもあります。

幹事団は中学3年生の父親が担当。ほぼ毎週土曜に学校に集まり、和気あいあいと打ち合わせをします。

研修合宿では、教育、学校生活、親子の関わり方などグループ討議し、校長先生が講評。懇親会やミサもあります。

サレジオ祭（学園祭）では「親父の焼き鳥」を出店。毎年大人気で2万5千本が完売!　売上は学校等に寄付されます。

連載インタビュー

ドン・ボスコの教え子たち

今、様々な分野で活躍しているサレジアンな同窓生を紹介します。

● 取材・文／編集部

なかお　けいこ

1958年大阪府堺市生まれ。城星学園高等学校で学ぶ。関西学院大学文学部卒業後、結婚して3人の子どもを育てながら自宅で児童英語教室を開く。育児が落ち着いて母校の城星学園中学校・高等学校の英語科講師となり、職場での出会いがきっかけでビルマ支援に関わり始める。現在も母校で英語科教諭として働きつつ、日本ビルマ救援センター代表を務める。

城星学園中学校・高等学校教諭
日本ビルマ救援センター代表

We are DB's Students 中尾 恵子さん

サレジオ歴／城星学園高等学校OG

引っ込み思案だった女の子が、友達や先生に背中を押してもらいながら新しいことに一歩ずつチャレンジする人に。今は母校で英語を教えながら、日本ビルマ救援センター代表として奔走する中尾恵子さんに話を伺った。

城星学園での思い出は?

志望校だった公立高校の受験に失敗して、城星学園の二次募集で高校から入学しました。そんなに目立つ生徒ではなかったのですが、先生方にかわいがっていただきました。

城星で初めてシスターに出会いました。宗教行事や聖書を学ぶことをとおして、生きるうえで大切な教えを教えていただいたと思います。英語と歴史が好きだったのと、城星の先生方の姿に影響も受けて、将来は英語か社会の先生になりたいと思うようになりました。

高校生活では、英語部に入って英語劇をがんばりましたね。「ロミオとジュリエット」や「サウンド・オブ・ミュージック」などの劇に挑戦して、夏休みに学校の教室に畳を敷いて合宿もしました。英語の弁論大会に出るために、顧問の先生が教会の知人でネイティブの人を紹介してくれて、特訓してもらったこともあります。

撮影していると、「先生、かわいいー！」と生徒が寄ってきた。先生と生徒の距離が近いのも城星の特長だ。

中学時代までは人の後についていくほうが楽だと思っていたのですが、城星では英語劇で主演したり、部長を務めたり、先頭に立つタイプに変わっていきました。女子校なので思い切ってできるようになったのかもしれません。友達や先生が背中を押してくれました。

ビルマ難民支援に関わり始めたきっかけは?

関西学院大学文学部で学び、城星で教育実習をさせてもらいました。大学卒業後、結婚して3人の子どもを育てながら自宅で児童英語教室を開いていました。3人目の子どもが小学生になって育児が落ち着いた頃、母校から声をかけられて英語科講師として城星に戻ってきました。そこで英語科のマドカ・チェイス先生と出会いました。一緒に1年間働いたのですが、彼女が珍しいペンケースを使っていて、それがビルマ（ミャンマー）の難民を支援するフェアトレード* 製品だと知りました。

1988年にビルマ民主化運動のきっかけとなる事件があったのですが、後に日本ビルマ救援センターの代表となるカワサキ・ケンさんとヴィサカさん夫妻がビルマのヤンゴン滞在中に、学生たちが殺されたその事件を目の当たりにしました。タイ国境に逃れて難民になった学生や少数民族の人びとを支援するために、カワサキ夫妻は日本帰国後すぐに日本ビルマ救援センターを立ち上げ、支援活動をスタートしました。活動メンバーは日本で英語教員をしている外国人が中心で、チェイス先生もこの支援活動に関わっていて、現地の難民女性たちが生活していくために自助グループを組織して作った織物製品などをフェアトレード製品として購入し、バザーなどで販売するボランティア活動をしていたのです。

ビルマ民主化運動のことや軍事独裁政権で多くの難民が出ていることを私も以前ニュースで知っていたのですが、その後は特に気に留めていませんでした。チェイス先生から支援活動のことを聞いて、私も英語教員としてできることをしたいと思い、活動に関わり始めました。難民の方々の手作り品をバザーなどで販売するほか、私が関わり始めた当時のセンターは日本にいる外国人にしか難民の情報を発信していなかったので、私が日本語に翻訳して日本人に向けても発信するようになりました。現地の様子を伝えるビデオに日

＊フェアトレード（Fair Trade）：直訳すると公平な貿易。開発途上国の製品や作物を適正な価格で継続的に取引することで、生産者の生活向上を持続的に支援する仕組み。

ヤウンニウにあるカレン族の難民キャンプの学校で、生徒たちと（前列中央が中尾さん。2015年撮影）

支援物資のソーラーランタンを手にする生徒たち

アニサカンにあるセント・メアリー・ドメニカ・マザレロ・コミュニティーの縫製学校で（右上が山地さん。2013年撮影）

本語字幕を付けたり情報を翻訳したりするなかで、ビルマ難民支援について学びました。2000年に代表のカワサキ夫妻がアメリカに帰国することになったのですが、支援活動を続けるために、私ができる範囲でよければと代表を引き継いで今に至ります。↙

2013年にビルマ少数民族地域で長年にわたり縫製指導をしてきた元大阪 YWCA 職員の山地和家子さんに連れられて、ピンウーリン近郊のアニサカンにある縫製学校を訪ねたら、なんと「セント・メアリー・ドメニカ・マザレロ・コミュニティー」という名前だったんです。城星のマリアさまと同じ絵が掲げてあって、マリア・マザレロ* の精神のとおり、貧しい村から女の子たちを集めて縫製を教える学校です。ビルマでサレジアン・シスターズの学校にめぐりあい、シスターや生徒たちと出会えたことに感動しました。

私はこれまでビルマ難民キャンプを50回近く訪問しています。支援活動とは思っていなくて、活動を通してすごく多くのものをいただいています。難民のために命がけで支援活動にたずさわる方々など、すばらしい人たちとの出会いもあります。難民キャンプで日々闘っておられる人たちにまた会いに来たいな、支援物資を日本で集めて次は何を届けられるかなと思いめぐらしています。帰国したら城星の生徒たちにも訪問した体験を伝えています。

＊マリア・マザレロ：ドン・ボスコと共にサレジアン・シスターズを創立したシスター

世界で起こっていることが、他人事でなく、自分のこととして考えられるような心の豊かさを持って

日本ビルマ救援センターの活動を教えてください

日本ビルマ救援センターは、大阪を拠点に現在10人ほどのスタッフが全員ボランティアで活動しています。活動内容は、まずタイ・ビルマ国境にある難民キャンプを訪問することです。現在、12か所の難民キャンプに約10万人のビルマ難民が生活していて、私たちのセンターが訪問するメラウー難民キャンプの人口は約9,500人、支援しているヤウンニウ校（幼稚園から高校まで）の生徒は480人います。当センターではこれまで毎年2回ほど現地を訪問して人びとのニーズを聞き、支援要請を受けて支援金を集め、学校を建てたり、少数民族の女性の自助組織の支援をしたり、彼女たちが作った織物を購入してきて日本のバザーで販売するなどしてきました。

毎年8月に大学生と現地訪問する約2週間のスタディーツアーを行い、帰国後に参加者による報告会をします。大阪大学外国語学部ビルマ語学科の学生たちとの関わりもあり、城星の同窓生も参加してくれます。渡航費用は引率の私を含め、全員自己負担です。

日本に来て難民認定申請する人たちのために、軍事政権下で迫害されてきたことを証明する資料作成を手伝うといったサポートも行ってきました。

20年も活動を続けられたのは?

前代表のカワサキさんに、私が日本人向けの学習会やバザー出店のアイデアを伝えると「思ったことは自分でやってみなさい」と言われました。できるかどうか自信がなくて困ったなと思ったのですが、実行してみると少しずつ活動や支援の輪が広がってきて、今に続いています。「ワン・ワールド・フェスティバル」など国際協力の大きなイベントにも参加して、ビルマ難民の状況を伝えています。

城星学園での教員生活は?

子育てをしてから教員になったので、お母さんたちの思いがわかりますし、一緒に子どもたちの成長を見守れるのが嬉しいですね。勉強に苦手意識をもつ生徒には、根気強く接してあげたいです。

城星は授業以外の場面でも、行事などを通して生徒とたくさん関わりがもてる学校です。私は英語クラブ（ESS）を受け持ったり、人権担当として人権週間などのイベントを企画したりと、英語科の授業以外でも生徒たちと一緒に学ぶ機会が充実しています。

若い人たちへのメッセージを

世界で起こっていることが、他人事でなく、自分のこととして考えられるような心の豊かさを持ってほしいです。私も子どもの頃は引っ込み思案でしたが、先生や友達が背中を押してくれました。日本でも、どこの国でも、小さなことからでいいので、勇気をもって一歩踏み出せば、世界はもっともっと広がっていきます。日々の学びや出会いを通して、子どもたちの背中をそっと押してあげたいです。

日本ビルマ救援センター（BRC-J）

1988年からビルマ民主化と難民支援を行うNGO。民主化の影で国境地域では今も政府軍による攻撃・略奪・強制労働・強制移住が続いており、難民キャンプの人びとや少数民族の支援、日本の大学生と共に現地訪問、来日したビルマ難民のサポートなどを行っている。

大阪府大阪市城東区森之宮
www.brcj.org

城星学園中学校・高等学校
大阪府大阪市中央区玉造2-23-26
www2.josei.ed.jp

ドン・ボスコのトモダチが暮らす街
Don Bosco Amici

サレジオ家族が関わりをもつ
世界そして日本の風景を紹介します。

Dalat *Socialist Republic of Vietnam*

ダラット／ベトナム社会主義共和国
公用語：ベトナム語

ベトナムは、東南アジアのインドシナ半島東部にある社会主義共和制国家。50以上の民族からなり、内戦だけでなく、中国・フランス・日本・アメリカ・韓国など諸外国の介入や、共産主義政権の圧政により受難の歴史を歩んできた。サレジオ会は1940年から宣教師を派遣し、教会・教育・福祉・出版事業を展開してきたが、共産主義政権は宗教的活動を弾圧。財産没収・投獄・国外追放などによりサレジオ会事業も90%が停止し、会員数は1985年で78人に減少。しかし、神の支えと会員の不屈の働きにより、現在は304人にまで復活。ベトナム管区は今、東アジア・オセアニア地域で最も活気があり、日本の教会・サレジオ家族にも多くの司祭・修道者・若い志願者を派遣している。

2017年11月、サレジオ会EAO東アジア・オセアニア地域の青少年司牧と広報担当者会議がベトナムで開催され、ダラットのサレジオ神学院を訪問。神学生たちが若さと熱気にあふれる歌を披露してくれた。ベトナムでは、サレジオ会の司祭・修道士を目指す70人以上の神学生が、祈り・勉学・奉仕に日々励んでいる。神学院食堂の壁一面に描かれているのは、ドン・ボスコが見た「二つの柱の夢」の場面で、荒波や砲弾を浴びる教会（船）が聖体と扶助者聖マリアの間に錨（いかり）を下ろしている。

Salesian People
サレジアンピープル

世界そして日本のサレジアンな人たちを紹介します。

トム・ウズンナリル 神父

Fr. Tom Uzhunnalil, sdb

インド・バンガロール管区
Bangalore, India

2017年9月、ウズンナリル神父は解放後まもなく検査療養等のためローマへ。フェルナンデス総長（左）は自身が首からかけていた「宣教の十字架」をウズンナリル神父（右）に贈り、解放を喜び合った。

互いのために祈り、互いに仕え合うことが奇跡を起こします

2016年3月4日朝、中東イエメンのアデンで、神の愛の宣教者会の貧しい高齢者施設をイスラム過激派のテロリストが襲撃し、修道女4人を含む16人を殺害、施設付司祭でインド出身のサレジオ会員トム・ウズンナリル神父を拉致した。教会や関係諸国の政府、人道団体が尽力し、世界中のサレジオ家族が祈りをささげ続け、2017年9月12日、ウズンナリル神父は奇跡的に解放された。体重は30kg近く落ち体力を失っていたが、過酷な経験をした彼の穏やかさ、落ち着きに皆が深い感銘を受けた。

ウズンナリル神父は拉致された時のことを語っている。「大きな苦しみを感じました。シスターたち、殺された人びとにあわれみを、そして人殺したちをゆるしてくださるように。み旨を受け入れ、最後まで神に忠実であるよう恵みと力をくださるよう祈りました。」監禁中、時間の大半を祈りにささげ、できるだけ多くの人のために祈り、霊的にミサをささげ、黙想したという。

最近出版された自伝『By Grace of God（神の恵みによって）』でウズンナリル神父は語っている。「囚われていた557日間……私は弱かったけれど、打ち負かされませんでした。不安でしたが絶望することなく、信頼を失いませんでした。私を捕らえた人たちに傷つけられる可能性もありましたが、そのようなことは起こらず、糖尿病や過度の緊張で体を壊すこともありえましたが、神はそれをおゆるしになりませんでした。神は試練を与えられましたが、一方で、恵みによって強めてくださいました。」

解放後、ローマ総本部で記者会見し、感謝の言葉と過酷な体験を語るウズンナリル神父。18か月で30kg近くやせて体力を失っていたが、穏やかさと落ち着きに満ちていた。

2017年12月、ウズンナリル神父はインド・ムンバイのドン・ボスコ・インターナショナルスクールを訪問し、自身の体験を語った。写真は訪問の際、生徒たちとの一コマ。

「自分の計画と神のみ旨との間に正しい結びつきがあることは、人生で満たされているためにとても大切なことです。『この状況で、神は私に何を望んでおられるのだろう?』と振り返らなければなりません。……銃声が聞こえ、シスターたちが倒れるのを見たとき、主が私にも命を明け渡すよう願っておられるのだと思いました。しかし、私は捕らえられました。監禁の日々が延々と続き、神は私のために何を用意されているのだろうと困惑の時を過ごしました。しかし、解放され、私は気づいたのです。神が生きておられ、私たちの祈りを聞き、ご自分のよいと思われる時に必ず答えてくださると証しすることが私の使命なのだと。」

家族と故郷の思い出

「私は1958年、父ヴァルゲーゼと母テレジアクティーの7人の子どもの5番目として、インド・ケララ州のラマプラムという美しい村に生まれました。私たちの小さな家は祈りと愛情、喜びの住まいでした。父は愛情深く、忍耐強い人でした。一度だけ、家族での夕の祈りに参加するのを眠気から拒んだ私は父に厳しく叱られました。子ども心に不満でしたが、人生で何を優先するか貴重な教訓となりました。母は信心の篤い優しい人で、子どもを良いキリスト者として育てることに心を砕きました。私たち兄弟は家事や農場の仕事を手伝いながら、一致と愛情のうちに育ちました。」

「子どもの頃から現在に至るまで、喜びの時だけでなく、最も困難な時も、神は共に歩み、世話してくださいました。希望がないように思われるときも、希望と勇気で満たしてくださいました。祈っても答えが返ってこないように思われるときも、神は私をふところに抱きしめてくださっていたのです。」

サレジオ会司祭・宣教師の道

トム少年が10年生のとき、サレジオ会員フィリップ・タイル神父が学校を訪れ、宣教師の道に興味のある人はいないかと呼びかけた。司祭になる望みを温めていたトムは、ほかの数人と共にすぐに手をあげた。両親は驚いたが息子の望みを喜んだ。

1990年に司祭に叙階され、育った農場での経験、技術系の養成を活かしながら、インド各地の現場で貧しい子ども・若者のための使徒職に邁進した。2009年、アンチュカンダム管区長は、バンガロール管区にゆだねられている宣教地イエメンで働く意志のある会員を募った。イエメンで働いていた親戚、サレジオ会員マシュー神父の存在は、かねてからウズンナリル神父の心を熱くするものがあった。「私は内なる呼びかけに応え、派遣される用意があると管区長に申し出ました。」拉致事件は、ウズンナリル神父がイエメンに派遣されて7年近くたった頃に起きたのだった。

ウズンナリル神父は自伝で語っている。「今まで以上に確信していることの一つは、互いのために祈り、互いに仕え合うことが奇跡を起こすということ。……どのように、どこで死ぬかということは大事ではありません。大事なのは、何のために生き、仕え、死ぬかということ。もし再び人生を与えられるなら、喜んでまた司祭になりたいです。」

News source
"By Grace of God", Tom Uzhunnalil, sdb, 2018
ANS 記事より

「ANS」は世界のサレジオ家族ニュースサイト。毎日世界各地のサレジオ関連ニュースが英語・イタリア語など6か国語で紹介されています。http://www.infoans.org/

シリア

紛争に苦しむ人びとの「平和のオアシス」

News Source: ANS

首都ダマスカスのオラトリオの子どもたち

シリア紛争が始まって8年、ますます危機的な状況に陥っている。シリアの首都ダマスカスにあるサレジオ会のオラトリオは「平和のオアシス」と呼ばれ、戦闘が続く中でも現地で暮らす人びとの精神的・物的支援活動を続けてきた。

ムニル・ハナチ神父が院長を務める支部のユースセンターでは、小学生から大学生までの1,300人の青少年が、毎日数時間、戦闘を忘れる時を過ごす。サレジオ会は人びとを温かく迎える雰囲気を心がけ、訪れるすべての人に1日1度、食事を提供している。多くの市民が事欠いている発電機や水も確保できている。悲しみや恐怖に覆われた日常の中、ここに来れば安らぎ、友情、喜びを見いだすことができた。

「状況は今年に入りさらに苦しくなっています。さまざまな原理主義グループの拠点になっているダマスカス郊外のグータから、無数のミサイルや砲弾が打ち込まれています。多くの市民や子どもが亡くなり、学校は休校し、首都には準戒厳令がしかれました。人びとは大きな不安にさらされ、私たちのオラトリオも、すべての活動を休止せざるをえなくなりました。バスに乗ったり歩いたりしてここに通う子どもたちがミサイルの犠牲になるかもしれないからです。状況が少し落ち着くまで、家にいるように呼びかけています。」この国に平和が回復されるようにとハナチ神父は祈りを呼びかけている。

東ティモール

サレジオ宣教の日にチマッティ神父を学ぶ

News Source: ANS

東ティモールでもチマッティ神父に
取り次ぎを願う祈りが始まっている

東ティモールの首都ディリで2018年2月24日、「サレジオ宣教の日」の集いが行われ、約100人が参加した。今年は日本宣教の父・フランシスコ・ザビエルと、日本のサレジオ会宣教の父・ヴィンチェンツォ・チマッティ神父についてのセミナーが行われた。チマッティ神父のビデオの翻訳など、東ティモール在住の辻村直さん（サレジオ高専同窓生、サレジアニ・コオペラトーリ）が尽力。スペイン人宣教師のマヌエル・フレイレ師が「チマッティ神父の列福を願う祈り」を東ティモールのテトゥン語にさっそく訳し、ディリにあるサレジオ会養成支部では、ノヴェナ（9日間の祈り）を始めている。

韓国

危険に直面する青少年の更生センターを開設

News Source: ANS

韓国・済州のサレジオ青少年更生センター

サレジオ会韓国管区は、非行に走る青少年の社会復帰を支援するため、2018年、済州でサレジオ青少年更生センターを開設する。済州家庭裁判所と連携し、家庭裁判所から任された若者たちが家庭や社会生活に戻るまで一定期間をセンターで過ごす世話を行う。サレジオ家族やカトリック教会の司祭・信徒など多くの協力を得て、開設が決まった。センターは済州島の中央に位置するコロンバン会のサンイシドロ農場に拠点を置き、ドン・ボスコの少年たちの家となる。

シエラレオネ

1年間で140人以上の少女を迎えたシェルター

News Source: ANS

ドン・ボスコ・ファンブルのシェルターの少女たち

シエラレオネにあるドン・ボスコ・ファンブルの「少女たちのシェルター」プログラムは、2017年の1年間で、140人以上の少女を助けることができた。さまざまな虐待の犠牲者である少女たちは、更生の歩みを始めるために温かく迎えられた。その歩みは宗教的、道徳的、霊的な側面に光を当てる。少女たちは毎日祈り、共同体と共に宗教祭儀にあずかり、神が自分たちを愛し世話してくださることを再び感じられるようになる。

スロベニア

移民をテーマに舞台パフォーマンス・プロジェクト

News Source: ANS

困難を抱える若者たちによる
舞台パフォーマンス

スロベニア・リュブリャナのコデリェヴォ共同体で活動する、困難を抱えた若者のためのスカラ・ソーシャルセンターは、5年前から「フスカボ」というアーティスト集団を結成。「チルコランディア」という舞台パフォーマンス・プロジェクトを立ち上げ、30人の若者が移住・移民をテーマに参加している。役者のほとんどは旧ユーゴスラビア諸国からの移民の第1世代か第2世代。多くの観衆に向けて、共生・創造力・社会環境の尊重などの価値を表現している。

DBK ドン・ボスコ基金

DBK［ドン・ボスコ基金］は、特に助けが必要な青少年の保護育成を支援する、サレジオの基金です。

サレジオ会の創立者ドン・ボスコの精神を受け継ぎ、貧困・家庭問題・災害等により、特に助けを必要とする青少年を保護育成する国内外のプロジェクトを支援しています。

DBKウェブサイト
http://salesians.jp/about/dbk
機関誌「DBKだより」バックナンバーもご覧いただけます。

DBK［ドン・ボスコ基金］では、ボリビア、モンゴル、南スーダン、日本国内など、世界各国のサレジオ関係グループによる青少年の保護育成プロジェクト等を支援しています。
ご寄付くださる方は、下記の振込口座まで（または本誌とじ込みの払込用紙にて）お振り込みください。

郵便振替口座番号：00190-5-292253
加入者名：ドン・ボスコ基金
※通信欄の寄付意向にチェックを入れて、寄付金額をご明記ください。寄付者氏名の非公表をご希望の方は、払込用紙に「匿名希望」（☑チェックマーク）をご記入ください。

アルゼンチン

ドン・ボスコプロジェクト

ドン・ボスコプロジェクト担当者
ソフィアとアグステイナ

聖ヨハネ・ボスコ教会での職業訓練

私たちの教会では最も貧しくて勉強できない子どもたちのために、主任司祭コルデラ・ホセ神父が数人の大人と青年たちを集め、子どもたちが成人に向かって成長すると同時に、職を身につけられるよう学べないかということから「料理・縫製・木工」のセンターを開設しました。

2017年度には8歳から18歳の青少年が集まりました。多くの子どもたちの家庭では暴力があり、不登校、性的虐待、健康問題などを抱えています。このドン・ボスコの家オラトリオは、職業のプロを育てる職業センターではありません。もっと素朴なものです。

学校に通い始めてもやめてしまう子どもたちを集め、将来、社会の中で犯罪者や盗人として生きることがないように、まだ素直さのある時に小さな職を身につけられるような教育をするならば、彼らも喜んで通うのではないかということで始めました。

2016年と2017年には、最初の良い実りがありました。私たちが行っていることは小さなことで社会事業とは全然比較にはなりませんが、ドン・ボスコの心をもって実践している教育の場であり、彼らを受け入れる家となっています。どうぞ引き続き、このセンターを支えてください。子どもたちからの祈りと感謝の言葉をお伝えします。

「日本の恩人の皆さん、ありがとうございます。アルゼンチンに来られましたら、ぜひ訪問してください。ドン・ボスコと共に。」

ボリビア

サンホセ教会「子ども食堂」

サレジオ会宣教師
倉橋輝信神父

子ども食堂で昼食を食べる子どもたち

ボリビアは国民の約7割が貧困層で、100人の子どものうち20人が栄養失調に陥っています。

DBKからの支援金により、ボリビアのサレジオ会は、貧しい地域の子どもたちのために授業料無償の学校を建設するプロジェクトを展開していますが、私が働いているモンテーロ市のサンホセ教会での「子ども食堂」にも力を入れています。

この「子ども食堂」では、日本から派遣されたJICA（国際協力機構）のボランティアが一緒になってプロジェクトを推進しており、100人の子どもたちに、10人のボランティアが昼食と軽食を提供しています。ボリビアの学校は午前と午後の2部交代制で、午前の授業を終えた子どもたちが教会に立ち寄り昼食を食べ、午後から授業がある子どもたちは、教会に来て昼食をとってから学校に行きます。子どもたちにとって栄養バランスの取れた食事はこれだけなので、子どもたちは本当に喜んでいます。親世代の多くは貧しい地域で学校がなかったため、教育を受けていません。ここでは、母親たちへの食育、料理教室、病気の説明もしています。私たちの活動は「大海の一滴」にすぎませんが、この一滴が大海になるのです。私も貧しさの中で、喜んで働いています。

東ティモール

ロスパロス児童養護施設

サレジアニ・コオペラトーリ
辻村直

ロスパロス児童養護施設の子どもたち

東ティモール国の最も東部に位置するラウテム県ロスパロス地区では、院長のトマス・グスマオ神父様を初めとする7人のサレジオ会員たちが準修練院（20数人の志願者も在籍）、児童養護施設と教区教会の運営のために働いています。

中でも、1959年にサレジオ会宣教師によって設立された児童養護施設の歴史は古く、開設から現在まで、常時、100人弱の子どもたちを受け入れています。

この施設で暮らす子どもたちの多くは、中学卒業後、施設を卒業し、主に農業で生計を立てることになります。このため、サレジオ会員と志願者たちは、勉学以外にも畑作業や家畜の飼育など、生活に必要な様々な技量を子どもたちに教えています。

現在の建屋は、1990年アメリカ合衆国国際開発庁の援助で建設されましたが、28年の経年劣化のため建屋の天井やドアなどが傷み、修繕が必要でした。修道院と児童養護施設に水を送る重要な役割を担う給水塔も老朽化のため危険な状態でした。

今回、皆様の温かいご支援で、同養護施設の修繕工事を実施しました。とりわけ、子どもたちの寝室は雨漏りがひどく、割れた窓から入る隙間風と疫病をもたらす蚊に悩まされていましたが、もうその心配もいりません。

子どもたち、そして彼らと寝食を共にする会員に代わり、心より御礼申し上げます。

1

人ひとりが愛されていると感じ かけがえのない命を大切にする乳児院

2

3

4

5

6

7

8

9

1. つぼみの寮で働くスタッフの皆さん。
2. つぼみの寮の子どもと保育士のシスター。
3. つぼみの寮のために作られたイエスさまと赤ちゃんのご像の祝別式。
4. 七五三の祝福の祈り。
5. 「こども家庭支援センターつぼみ」として地域の親子のために開催している「なかよしタイム」の一コマ。
6.7. 毎年5月に行われる聖母行列。
8. 日向学院のボランティアの皆さんに勤労感謝の集い。
9. 日向学院のボランティアの生徒。

Visit the Salesian Family

● 社会福祉法人カリタスの園 乳児院 つぼみの寮

イエスのカリタス修道女会
宮崎県宮崎市吉村町

○ 家庭で養育困難な乳幼児の「もう一つのお家」

乳児院は、様々な事情により、家庭で養育が困難な乳幼児をお預かりする、子どもたちにとっての「もう一つのお家」です。「宮崎つぼみの寮は、キリストの優しさに包まれて一人ひとりが愛されていると感じ、喜びと感謝の心で、かけがえのない命を大切にする乳児院です」とのビジョンを掲げ、子どもたちの成長を愛情をもって支えるよう努めています。

○ 地域の子育て相談、里親サポートへの取り組み

2016年度の児童福祉法の改正により、「家庭養護の重要性」が打ち出されました。つぼみの寮は、1935年に創設以来83年間、県内唯一の乳児院でしたが、「宮崎県家庭的養護推進計画」(15年計画)で県内の乳児院の地域分散化、里親への委託推進を含めた支援が進められ、県南方面に新たな乳児院が開設され、いずれは県北でも乳児の受け入れが行われる予定です。

こうした中で、つぼみの寮には2016年4月に児童家庭支援センターが併設され、子育て相談や里親トレーニング事業が行われるようになりました。子育て相談では、365日24時間、保護者や子ども自身からの多岐にわたる相談に応じています。もちろん真夜中の電話相談であっても対応します。

里親トレーニング事業では、乳幼児からの里親委託も想定し、低月齢の赤ちゃんの養育技術の向上を目的にトレーニングを行っています。個別トレーニングでは、ミルクの作り方、授乳や離乳食の食べさせ方、沐浴(もくよく)の仕方、オムツ交換などのトレーニングを行っています。グループトレーニングでは、子どもの発達や障害、病気の時の対応の仕方など、様々なテーマで講演会も行います。講演会には里親だけではなく、県内の児童養護施設など里親支援専門機関のスタッフも参加します。里親が子育てをしていく上で様々な困難に直面したとき、孤立することなく、しっかりとサポートしていく体制の構築が必要だからです。それは里親だけではなく、子どもの幸せに必ずつながっていきます。

○ ボランティアの存在に支えられて

乳児院には、個人やグループなど、様々な方がボランティアとして関わってくださっています。近くにあるサレジオ会の日向学院の生徒も週に2回来てくださいます。以前の大舎制に比べると、現在はユニット制で小規模化されていますが、それでも子ども一人ひとりの関わりには限界がありますので、ボランティアの存在は大変ありがたいです。ボランティアの方々が優しく抱っこや声かけをしてくださることは、子どもたちの甘えたいという思いが十分に満たされる特別な時となっています。このように多くの方々に支えられて子どもたちは日々成長しています。

○ 一人ひとりとの関わり、家庭との関わりを大切に

乳児院の分散化により、つぼみの寮の定員は、35人から30人に減りました。今後一層、乳児院の小規模化が進められる中で、一人ひとりに対してはより密な関わりが望まれます。それぞれの地域に乳児院ができることにより、面会など家族の交流も行いやすくなり、家庭復帰に向けた家庭の再構築がより進むことが期待されます。

○ 子どもたちから喜びと感動をいただく日々

乳幼児期は、人格形成の一番大切な土台を築く時です。この大切な時期を過ごしている小さな命に関わらせていただいていることを、日々感謝しています。私たち一人ひとりは、子どもたちのお世話をする一方で、子どもたちの日々の成長や何気ないしぐさに癒(いや)され、多くの喜びと感動をいただいています。とはいっても、幼い子どもたちですから、病気や怪我など日々たくさんの心配があることも確かです。決して楽な仕事ではありませんが、職員一人ひとりは、「自分たちは子どもたちのために、必要とされ、神さまに呼ばれたのだ」と確信しています。自らのかけがえのない命に気づき、かけがえのない命に奉仕するために神から呼ばれた存在であることを日々自覚し、この天職を通して神様の創造のわざの継続に参与していきたいと思っています。

(文・写真/社会福祉法人カリタスの園 乳児院 つぼみの寮提供)

社会福祉法人カリタスの園
乳児院 つぼみの寮
宮崎県宮崎市吉村町沖ノ原甲1543
http://miya-tubomi.jp

つながれ！
サレジオ青年
SYM JAPAN
Salesian Youth Movement Japan

2017.8.25-28 SYM夏合宿 in 宮崎

祈りながら歩く、　歩きながら祈る。

～サレジオ家族の原点に迫る～

2016年夏の上五島巡礼に続き、2017年8月も「祈りながら歩く、歩きながら祈る」をテーマに、サレジオ青年のための徒歩巡礼を行った。訪れたのは宮崎県！　サレジオ会が日本で活動を始めたところであり、日本のサレジアン・シスターズの事業の出発点、そしてイエスのカリタス修道女会（以下カリタス会）の誕生の地と、サレジオ家族に最もゆかりの深い場所である。巡礼団は全国から集まったサレジオ青年と、カリタス会志願生、3修道会の神父・ブラザー・シスター方の計27人。4日間の「サレジオ家族の原点に迫る」旅の記録を綴る。

●文・写真／SYM JAPAN事務局

カリタス会の宮崎修学志願院に現地集合し、志願生たちとの昼食から巡礼が始まった。隣の宮崎修道院には歴史展示資料室があり、カリタス会の草創期を知る村岡雪枝シスターの解説を受けながら（右ページ写真1）、初期のサレジオ会員とカリタス会の想像を絶する労苦の歴史を学んだ。その後サレジオ会が初めて司牧を受け持った宮崎教会（2）、チマッティ神父が唯一校長を務めた日向学院中学校・高等学校（3）、隣接するサレジオ会宮崎修道院を巡って志願院に戻り、1日目を終えた。

今回の巡礼は宮崎の強すぎる日差しを避けるため、夜早く寝て真夜中に起床、朝まで歩き、午前中また少し寝て正午に起床し活動を再開するという過酷なスケジュールだった。26日0時半、チマッティ神父が行き来していたという宮崎～田野の道のりをたどるため、志願院を出発した。まず4kmを歩き、南宮崎教会を訪問（4）。その後コンビニで休み祈りながら（5）、シスター方が洗濯にきていたという川を渡り（6）、美しい自然の中を歩き（7）、16kmを経て到着！田野聖母幼稚園で休憩した後、チマッティ神父が苦労して育てたという田野教会でお話を聞き、信徒の皆さんと共にミサをささげた（8）。この日は朝食、昼食、夕食までも田野教会信徒の皆さんがご用意してくださり、宮崎の美味しい地鶏や冷や汁などを堪能した…！

そうして27日午前2時、満天の星と流れ星に大騒ぎしながら、徒歩巡礼再開。途中、都城教会信徒の方がご自身の会社を休憩場所に貸してくださり（9）、20kmを超える道のりを歩き切って、ついに都城教会にたどり着いた！（10）　徒歩巡礼はこれにて終了。カリタス会が運営する都城聖ドミニコ学園高等学校を見学し、都城教会で昼食（流しそうめん！スイカ！）をいただいた。信徒の皆さんにお話を聞き、共にミサをささげてお別れ。バスで日向学院海の家に移動し（11）、最後の分かち合いをした（12）。

最終日は海で過ごし、疲れも知らず若者らしくはしゃいで遊んだ。

4日間の旅の記録は以上。無償の愛で私たちを受け入れ、サポートしてくださった宮崎の皆さんに深い感謝を示すとともに、参加者の声を紹介して終わりたいと思う。

「生き証人とも言えるシスターや、当時の信徒の血を引くご家族のお話は、どんな史料を読むよりもずっと現実的に心に響いて、非常に貴重な経験となった」

（24歳・望洋庵青年）

「本当にお金も言葉も何もない中で、どうしてここまでのことができたのかと、宣教師たちの不屈の精神に感服した。並々ならぬ苦労の上に今のカトリック教会があることを思うと、普段の自分の信仰生活や生きる姿勢について考えさせられた」

（23歳・サレジオ学院OB）

「教会が小さくても人が少なくても、信徒の方は自分の教会に誇りをもっていて、特長をよく認識しており、それはすばらしいことだと感じた。正直、自分の教会に自信をもったことなどなかったし、ほかにすごい教会がたくさんあるじゃないかと思っていたが、巡礼の中で自分の教会に興味がわき、その歴史と価値を理解して自信をもちたい、もつべきだと感じた」　（21歳・聖書学校OB）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

つながれ！サレジオ青年
SYM JAPAN
Salesian Youth Movement Japan

第13回 SYMの集い☆スペシャル

ようこそ！チャーベス神父様

Salesian Youth feat. Fr.Chavez!

2017年10月21日、東京・調布サレジオ神学院で第13回SYMの集いが開かれました。今回はスペシャルな集いとして、来日されたサレジオ会前総長のパスクァール・チャーベス神父をご招待！　約60人の青年が集い、サレジオ家族の仲間たち、そしてチャーベス神父との交流を楽しみました。

初めに調布教会信徒の方々が作ってくださった夕食を、いただきます！　こちらのテーブルはチャーベス神父と、山野内管区長も一緒に。緊張してるかな？

夕食が終わると、さっそくレクリエーションタイム。ドン・ボスコの歌に合わせて、みんなでLet's Dance♪

ダンスの次は自己紹介ゲーム。名前や、サレジオ家族とのつながりを聞いて、メモメモ…。新しい友達がたくさんできました！

レクの後は、チャーベス神父への質問タイム！「好きなメキシコ料理は何ですか？」「SASHIMI!（刺身！）」おちゃめな答えにみんなで大笑い。

講話では「社会が直面する課題に関心をもつように」「"Think Globally, Act Locally."まず自分自身が変わることが大切」「何のために、何をしたいのかを明確に意識して取り組んでほしい」とメッセージ。

チャーベス神父が、現代社会の重大な課題として挙げた「経済的不平等」「平和の維持」「気候変動」「移民問題」「人種主義」の5つについて、自分たちに何ができるかをグループごと分かち合いました。

聖体賛美式。「あなたがたは地の塩、世の光である」（マタイ5章）を読み、「塩が形を変えても味を保つように、私たちも形を変えられても大切なことをずっと伝える存在でありたい」と話されました。

最後に記念撮影。参加してくれた青年の皆さん、集いを支えてくださった神父様、シスター、信徒の方々、そしてチャーベス神父様ありがとうございました！

SYM JAPANの公式Twitterアカウントができました！

https://twitter.com/SYMJAPAN
「@SYMJAPAN」で検索！　フォローしてね！

●公式Facebookグループ［SYM JAPAN］
https://www.facebook.com/groups/SYMJAPAN

●公式LINE@アカウント［@pzs3581n］
https://line.me/R/ti/p/%40pzs3581n

お問い合わせ先
SYM JAPAN事務局　symjapan@salesians.jp

サレジオ青年

イスラエル巡礼

SYM JAPAN*

イエスのあしあとを辿る11日間の旅

忘れられない夏を、ドン・ボスコの仲間たちと——

2015年8月、ドン・ボスコ生誕200周年を記念し、サレジオ青年で訪れたイタリア巡礼から早3年。今回はついに、イエスのふるさと、イスラエルへの巡礼を企画しました！
ドン・ボスコがいつも心に燃え立たせていた情熱の源は、イエス・キリストであり、その母マリアでした。この巡礼ではイエスとマリアゆかりの地、そして現地のサレジオ会事業を訪れながら、新たにドン・ボスコの火を心に灯し、日本でその熱を伝え続ける力を得たいと思います。またとないこの機会を、ぜひ共にしましょう！

日　　程 ＋ 2018年8月9日㊍ ～19日㊐

参加対象 ＋ サレジオ家族に関係する18～30歳の青年男女（高校生を除く）
※巡礼参加後もサレジオ家族の諸活動への積極的な参加が望まれます。

募集要項・参加申込書は下記QRコード（URL）からダウンロードできます。
http://hfi-tour.co.jp/sym2018.html

お申し込み ＋
●募集要項をご覧いただき、旅行の詳細および注意事項をよく確認してください。
●参加申込書に必要事項をご記入の上、パスポートのコピーも合わせて、**5月15日(火)まで**に旅行会社（ハートフルインターナショナル）へFAXをお送りください。
●参加費のお支払い方法につきましては、お申し込みを確認後、担当者より詳細をご連絡いたします。

お問い合わせ ＋ サレジオ会青少年司牧委員会　担当：浦田 慎二郎（うらた しんじろう）神父
〒167-0021東京都杉並区井草2-35-8 杉並育英サイテック
TEL. 03-5310-6345　FAX. 03-5310-6389　E-mailアドレス mshinurata@donboscojp.org

*SYM JAPANは、日本におけるサレジオ青年運動（Salesian Youth Movement）のことで、サレジオ家族に関係する18～30歳の青年による、青年のための運動です。グループの枠を超えてつながり、ドン・ボスコの精神をわかちあいます。

ご寄付のお願い

皆様のあたたかいご支援を心よりお願い申し上げます。通信欄にご寄付の意向を明記し、下記口座までお振り込みください。
郵便振替　口座番号　00100-7-412947
加入者名「ドン・ボスコの風」編集事務局
★サレジオ青年 聖地イスラエル巡礼支援のため
※郵便振替は、全国の郵便局またはゆうちょ銀行の窓口、払い込み機能付きのゆうちょ銀行のATMからお手続きが可能です。

サレジアン スクールライフ！レポート

サレジオ家族の学校の皆さんが学校生活をエンジョイしている様子を、各校のHPやFacebookからご紹介します。

▶ サレジオ中学校　（東京都小平市）

全日本中学校バレーボール選手権大会で準優勝

全日本で準優勝した
サレジオ中学校バレーボール部

サレジオ中学校のバレーボール部は、2017年8月25日、宮崎県で開催された第47回全日本中学校バレーボール選手権大会・男子の部で決勝に進出、駿台学園中学校（東京都北区）と対戦して見事準優勝の成績を収めました。全国制覇にはあと一歩でしたが、2003年・2013年に続く3度目の準優勝という快挙です。日向学院中学校・高等学校（宮崎県宮崎市）は、兄弟校としてサレジオ中学校バレーボール部に練習場を提供するなど、物心両面で応援しました。

▶ 大阪星光学院高等学校　（大阪府大阪市）

化学グランプリで２人が金賞獲得

2017年8月18～19日、「夢・化学-21」委員会と日本化学会による「化学グランプリ2017」の二次選考が筑波大学（茨城県つくば市）で行われ、大阪星光学院高等学校3年（当時）の宮川暉史（てるふみ）さんと米田圭佑（けいすけ）さんが金賞を獲得しました。全国4千人を超える高校生の参加者の中から一次選考を通過した成績上位者80人が二次選考（実験をともなう記述式試験）に挑んだ中での快挙。大阪星光学院からはほかにも2人が銀賞と銅賞を獲得しました。

▶ 星美学園中学校　（東京都北区）

中学２年生で作家デビュー

鈴木るりかさんの作家デビュー作
『さよなら、田中さん』

星美学園中学校2年（当時）の鈴木るりかさんが、2017年10月、連作短編集『さよなら、田中さん』（小学館）で作家デビューしました。鈴木さんは小学4年生の時（2013年）、小学生対象の「12歳の文学賞」（小学館主催）に小説を応募して大賞を受賞。続く2014年と2015年も史上初となる3年連続で大賞を受賞しました。大の本好きで、幼い頃から自宅の隣にある図書館に毎日のように通っていたそうです。本書は5つの連作短編からなり、底抜けに明るい母親と二人で暮らす小学6年生の少女「花ちゃん」が主人公。二人の日常の出来事を、ユーモラスに、時にじわっと泣かせる筆致で描いています。

▶ 目黒星美学園・星美学園・サレジオ学院

合同錬成会を開催

チマッティ資料館で
コンプリ神父の話を聞く生徒たち

目黒星美学園中学高等学校（東京都世田谷区）、星美学園中学校・高等学校（東京都北区）、サレジオ学院中学校・高等学校（神奈川県横浜市）の合同錬成会が2017年10月28日に開催され、生徒会やカトリック研究会などの生徒有志と教職員が参加しました。参加者は調布サレジオ神学院とサレジアン・シスターズ本部修道院（いずれも東京都調布市）を訪問し、チマッティ資料館の見学・墓所巡礼、聖堂での祈り、茶話会などを通して、サレジオ家族のつながりを深める有意義なひと時を過ごしました。

▶ 日向学院中学校・高等学校　（宮崎県宮崎市）

書道部　国際学会でパフォーマンス

書道パフォーマンスの作品と
日向学院書道部の皆さん

日向学院書道部は、2017年11月5日、シーガイア・コンベンションセンター（宮崎市）で開催された「ISEC国際溶媒抽出学会2017」の歓迎パーティーで、世界各国からのゲスト約350人を前に、和楽器の情熱的な音楽に合わせて書道パフォーマンスを行いました。パフォーマンス後にはゲストの中から希望者を募って書道体験を行い、書道部員がアシスタントとして漢字の書き順を教えたり、名前の手本を書いたりして、楽しい体験・交流の機会となりました。

▶ サレジオ学院高等学校　（神奈川県横浜市）

2泊3日で高１進路ガイダンスを実施

サレジオ学院高等学校１年生の
進路ガイダンスの様子

サレジオ学院高等学校は高校1年生を対象に、2017年11月13～15日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）にて2泊3日の進路ガイダンスを実施しました。夜の部では、毎年多くの卒業生である大学生・大学院生が訪れ、大学での学びの話をします。今回も2日でのべ約60人の卒業生が協力し、高校1年生は興味のある分野の話を聞き、アドバイスを受けました。最終日は「起業しよう！」をテーマに、関心のある学問・職業で30のグループに分かれて事業案を作成し、プレゼンテーションしました。

▶ 都城聖ドミニコ学園高等学校　（宮崎県都城市）

地元のお祭パレードに参加

パレードで役を演じる都城聖ドミニコ学園高等学校の生徒たち

都城聖ドミニコ学園高等学校のインターアクトクラブは、2017年11月23日、地元の宮崎県都城市で開催された「島津発祥まつり」の「みやこんじょ歴史絵巻明道館パレード」に参加。おんな城主春嶺（しゅんれい）のなぎなた隊や巫女（みこ）役を演じたほか、カナダからの留学生も着物を着て笑顔で行進し、放課後の練習の成果を発揮していました。

▶ 城星学園中学校・高等学校　（大阪府大阪市）

「お米ワンカップ運動」で釜ヶ崎支援

「お米ワンカップ運動」で集まった支援物資

城星学園中学校・高等学校では、ボランティア活動グループ「ラウラサークル」の呼びかけで、2017年11月29日～12月12日、「お米ワンカップ運動」を行いました。これは、「他者のために、他者と共に生きる」というドン・ボスコの精神により、ホームレスから立ち上がろうとしている方々のための自立支援施設である釜ヶ崎「出会いの家」への支援として毎年行っている活動で、城星学園小学校も協力しています。厳しい冬の寒さのなか生活に苦労なさっている方々に「出会いの家」を通して支援物資をお届けすることができました。

▶ 目黒星美学園中学高等学校　（東京都世田谷区）

近隣の団地で「ひまわりカフェ」開催

目黒星美学園中学高等学校は、2017年12月19日、学校近隣の団地で、地域の皆さんと協力し「ひまわりカフェ」を開催しました。これは、恒例となっている東北被災地ボランティア研修の際に仮設住宅でお茶を飲みながら団らんする集い「星美っ子カフェ」の経験を活かし、身近な地域でも実践するもの。当日は9人の生徒と約40人の団地の皆さんが参加。最初は緊張気味だった生徒も、輪の中に入って自己紹介をし、年末年始の過ごし方や地域の良いところを教えていただいたり、戦争中の体験談を聞いたりするうちに、皆さんと打ち解けることができました。生徒による合唱には大きな拍手をいただき、懐かしい歌も一緒に歌って、温かい交流のひと時となりました。

地域の方々とのお茶会で一緒に歌を歌う目黒星美学園中学高等学校の皆さん

▶ サレジオ工業高等専門学校

ビジネスプランコンテストで大賞

大賞を受賞した杉山大季さん（左）と
指導教員の米盛弘信先生

2018年1月28日、東京都町田市の「COMMUNE BASE マチノワ」で初開催された「まちだ未来ビジネスプランコンテスト＆マーケット2017」の最終審査会が行われ、サレジオ工業高等専門学校機械電子工学科3年（当時）の杉山大季さんが発表した「小型電動二輪車の非接触給電スポット」が、最年少の登壇ながら一般部門と学生部門総合1位の大賞を受賞しました。これは電動自転車の充電器を外さずに充電できるようにする仕組み。機械電子工学科では、外部イベントへ積極的に参加できる環境を整え、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の育成にも力を入れています。

Salesian School life! Report

教育・福祉

星美ホーム後援会 チャリティーイベント初開催

星美ホーム後援会チャリティーイベントの様子

2017年10月7日、児童養護施設 星美ホーム（東京都北区）のオフィシャル後援会「Seibi Shining Kids Family」は、初のチャリティーイベントを開催、星美ホーム講堂（サローネ）が満席となる約100人が集まった。星美ホームでは施設の老朽化と養護環境の変化に対応するため建て替えを順次進めているが、サローネの建築資金が足りず、寄付金（目標額1億円）を募集している。このチャリティーイベントは、地域社会の皆さんに星美ホームの活動への関心を寄せていただき、社会の皆さんと共に子どもたちを育て、未来につなげていくよう呼びかけるもの。星美ホームの指導員、ケアワーカー、臨床心理士などの専門スタッフや、建築家、後援会の代表者、ボランティアらが、子どもたちの状況や支援の必要性を訴えた。また、エンターテイメントとして子どもたちとゲストが歌を披露し、星美ホーム特製の軽食も振る舞われ、支援者の皆さんと和やかな懇親のひと時を過ごした。

Seibi Shining Kids Family は公式Facebookページでも随時、子どもたちの未来を共に考えるイベントの開催案内や星美ホームの行事紹介、寄付募集を行っている。

サレジオ工業高等専門学校 フィリピン・タイ・日本 学術文化交流研修

2017年10月28日から8日間、サレジオ高専（東京都町田市）が受け入れ機関となり、JST科学技術振興機構の日本・アジア青

フィリピンとタイから来日した学生たち

少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプラン」を実施、フィリピンからドン・ボスコ・マンダルイヨン工科大学の学生10人と、タイから泰日工業大学の学生2人が来日した。

宮ヶ瀬ダム・水とエネルギー館、三光機械（株）本社工場、日本科学未来館等の見学を通して、自然と科学技術の関係や日本の最先端技術について学ぶ機会を提供。また、日本の伝統文化体験教室も開催し、浴衣姿で狂言の所作に挑戦、貴重な異文化体験となった。サレジオ高専キャンパスでは、デザイン・工学の専門授業や実験施設等を見学し、メモを片手に教職員や学生らに積極的に質問。英語授業や剣道部体験稽古に参加したこともあって、日本人学生と活発に交流する微笑ましい姿がキャンパスのあちらこちらで見受けられた。

サレジオ会員と協働者との集い初開催

協働者の体験と意見に耳を傾ける参加者

日本全国のサレジオ会の事業所で働く協働者とサレジオ会員の初めての集いが、2018年1月7～8日の2日間、神奈川県三浦市の研修施設で行われた。日本全国のサレジオ会の学校（5校）、幼稚園（3園）、保育園（1園）、児童養護施設（2施設）、出版部門（1社）の計12事業所から、協働者の代表20人とサレジオ会日本管区長の山野内倫昭神父をはじめとするサレジオ会員14人の計34人が参加した。日本では今、青少年を取り巻く家庭や社会の環境が変化し、またサレジオ会員数が減少し高齢化が進んでいる。この状況の中で、とくに協働者の思いや体験に耳を傾け、今後サレジオ会員と協働者が助け合って「ドン・ボスコらしい教育」をどのように実践し、サレジオの使命を果たしていけるのかについて、夢や課題を分かち合う機会として、この集いは企画・開催された。

1日目は、各事業所の紹介と祈りの集い、懇親会をとおして互いを知り合い、和気あいあいとした家族的な雰囲気を楽しんだ。2日目は、3人の協働者の体験と意見に耳を傾け、校種別（業種別）のグループに分かれてサレジオ精神を実践するための課題や夢などについて分かち合い、最後は感謝のミサを捧げて集いを終え、充実した学びと出会いの機会となった。

サレジオ家族教職員養成講座 新年度も受講者を募集中

サレジオ家族教職員養成講座で学ぶ参加者たち

サレジオ会の研修施設サイテック（東京都杉並区）で開催されているサレジオ家族教職員養成講座（参加者約50人）が、2018年3月9日、2017年度（全6回）の最終回を迎えた。参加者の教職員は、年度の締めくくりにあたり1年間の講座を通して学んだ「教育者ドン・ボスコ」の姿を再度ふり返り、次年度に向けた目標をドン・ボスコのご絵の裏に記して持ち帰った。この日は皆勤賞・精勤賞の表彰も行われた。2018年度も5月から講座を開催予定。司祭・シスター・教職員有志からなる講座コーディネーターズがプログラムを企画し、新たな参加者を募集している。

同窓生

サレジオ同窓会日本連合 若手ワーキングチーム初会合を開催

吉田連合会長と山野内管区長を囲むサレジオ同窓会連合ワーキングチームのメンバー（2017年10月）

サレジオ同窓会日本連合（サレジオ高専、サレジオ小学校中学校、サレジオ学院、大阪星光学院、日向学院）は、2017年10月の役員会で若手を中心とするワーキングチーム（WT）を発足、その初会合が2017年11月25日、サレジオ会の研修施設サイテック（東京都杉並区）にて開催された。このWTは、日本にある5つのサレジオ会学校の同窓生16人からなり、顧問を三島心神父と鈴木正夫神父が務める。

WTは、広報、アジア大会（2020年に日本で開催予定）、財務法人化の3チームからなり、この日の会合には、来日中のヴァツラフ・クレメンテ神父（サレジオ会東アジア・オセアニア地域顧問）、山野内倫昭神父（サレジオ会日本管区長）も同席して、同窓会連合の世界・アジア地域における最新の状況や同窓会青年部について有益な情報を分かち合い、また広報や財務に関わる諸課題についても意見を交わした。

ドン・ボスコの精神「アッシステンツァ（助けを必要とする若者と共に、若者のために）」を大切にすること、同窓生間で同窓会連合に関する情報を共有し協力や寄付を呼びかけるため公式ウェブサイトを立ち上げること、サレジオ会学校の在校生や若手同窓生の交流に資する意義ある援助や行事を企画していくことなどの方向性を確認する会合となった。

WTでは引き続き会合・交流を重ねながら、同窓会連合の具体的なプロジェクトを検討・実施していく。

青少年

YCC（Youth Catholic Camp） 日向学院海の家で開催

YCCの参加者。日向学院海の家にて。

毎年春休み恒例のYCC（Youth Catholic Camp）が2018年3月24～27日の4日間、日向学院海の家（宮崎県日南市）にて開催された。今回の「十字架が教えてくれること」をテーマに、九州各地のカトリック学校や教会の中高生52人が参加し、大自然の中で充実した時を分かち合った。

修道会・信徒の会

サレジオ家族 チャーベス名誉総長の合同黙想会と サレジアンファミリーデイを開催

サレジアンファミリーデイでチャーベス名誉総長を囲んで

2017年10月15～21日、サレジオ会、サレジアン・シスターズ、イエスのカリタス修道女会の院長・代表者ら45人が、サレジアン・シスターズ山中黙想の家（山梨県南都留郡）に集い、サレジオ会名誉総長パスクアール・チャーベス神父の指導による黙想会が行われた。テーマは、教皇フランシスコによる全教会のための、特に奉献生活者のための「宣教する弟子プロジェクト」に焦点をあてたもの。サレジオ家族の修道者は、地の塩、世の光となるために、神と隣人を中心とする生き方、グローバルな世界の挑戦に開かれた生き方をより深め前進しなければならない、と語った。

チャーベス神父はイタリア・ローマから来日。1週間の黙想会の後、10月21日は調布サレジオ神学院（東京都調布市）で日本のSYM（サレジオ青年運動）の若者との集いを開催。翌22日は星美学園（東京都北区）で日本のサレジオ家族8グループ約180人が集う「サレジアンファミリーデイ」が行われ、DBVGドン・ボスコ海外青年ボランティアグループの活動報告会と「世界宣教の日」にあたりチャーベス神父の講話があった。チャーベス神父は「若者たちは自ら出かけて行き、他の人たちと何かを分かち合う素晴らしい体験を話してくれました。私たちは、救い主イエスの愛を地の果てまで伝えに行く、宣教師の"家族"。世界中そして"デジタル大陸"でも、私たちの喜びを、まだ知らない人たちと分かち合うために、神の導きに信頼して出かけて行きましょう」とのメッセージを送り、日本でのたくさんの出会いと家族的な分かち合いに感謝の言葉を述べた。

イエスのカリタス修道女会 東北被災地の復興を願う祈りの旅

東北被災地で歌うスモールクワイア

2017年12月19～21日、イエスのカリタス修道女会スモールクワイアは東北被災地復興支援を続けるカリタスジャパン石巻ベース（宮城県石巻市）と米川ベース（宮城県登米市）の活動に参加し、クリスマス・ミニコンサートツアーを行った。同会のスモールクワイアは震災後から被災地の慰問を続けており、今回は8人のシスターが訪問。宮

Salesian Family in Japan

サレジオ家族
国内ニュース

城県東松島市野蒜（のびる）の集団移転団地の集会所や、南三陸町のあさひ幼稚園、のぞみ福祉作業所、志津川の災害公営住宅、南三陸町の入谷桜沢公営住宅など、各地で皆さんが平和で幸せであるように祈りを込めて歌い、地元の方々やボランティアの方々と団らんや食事を共にして和やかな時間を過ごした。また、訪れた震災遺構では、亡くなった方のため、被災地で今もなお苦しむ方のために祈りを捧げた。

イエスのカリタス修道女会 国際養成研修会を開催

韓国と日本のイエスのカリタス修道女会シスターによる交流の一コマ

2018年1月10～23日、イエスのカリタス修道女会は修道会発祥地である日本で国際養成研修会を開催し、今回は韓国と日本のシニアシスター20人が参加。長崎から始まり、発祥の地を巡り、東京杉並の日本管区本部で研修を行った。創立者アントニオ・カヴォリ神父を直接知る会員の証言を聞き、会の創立の歴史や精神を学んだ。ゆかりの場所に触れることは、韓国だけでなく日本の会員にとっても貴重な体験となり、共に学び・祈り・交流する喜びの時となった。

サレジアン・シスターズ 東アジア管区協議会に青年代表が参加

タイで開催された東アジア管区協議会の様子

2018年2月8～14日、サレジアン・シスターズのCIAO東アジア管区協議会がタイのサンプランで開催され、シスター・イヴォンヌ・ランゴア総長をはじめアジアの9つの国や地域から代表者が参加した。この会議は2014年総会をふり返り、次期総会に向けた課題を探るもの。今回は一般信徒として共に働く人びと（ミッションパートナー）と青年にも参加枠が広がり、日本管区からは3人のシスターのほか、2人の青年も参加した。

青年代表として参加したVIDES JAPAN（サレジアン・シスターズの国際ボランティア団体）の山田真人さんは、会議のプログラムの中で、自身がサレジアン・シスターズとの関わりや活動を通して成長した経験を活かし、現在は日本でのビジネスを通じてアフリカのマラウイに給食支援をする仕事をしていることを「生きた証し」として紹介した。

多様性豊かなアジアの経験や課題を共有し、ミッションパートナーや青年と共に、ドン・ボスコの精神で社会と積極的に関わっていくことを確認する有意義な会合となった。

サレジオ家族 サレジオ霊性セミナーを開催

関東地区サレジオ霊性セミナーの様子。イエスのカリタス修道女会管区本部にて。

2018年2月10日、関東地区のサレジオ霊性セミナーが、イエスのカリタス修道女会管区本部（東京都杉並区）にて開催され、サレジオ家族のメンバー約180人が参加した。2018年のサレジオ家族年間目標（ストレンナ）に関するフェルナンデス総長のビデオメッセージを視聴した後、日宇愛シスター（イエスのカリタス修道女会）が今年1月にローマで開催されたサレジオ霊性週間の内容を紹介しながら講話を行った。ストレンナのキーワードである「傾聴」と「同伴」について、「話すことより聴くこと、静けさのうちに神や目の前にいる若者・大切な人を中心において、居心地のよい自分の殻から抜け出す勇気と忍耐が必要」、「かかわりを求めている若者たちに『私はあなたのためにある』とまなざしと全存在で伝えたのがドン・ボスコ。問題を解決しようとするのではなく、若者が望みや思いを表現できるように心を開き、謙虚に若者を神にゆだねる気持ちで祈ることが大切」だと語った。

午後は、浦田慎二郎神父（サレジオ会）が近刊『オラトリオの少年たち』の紹介を行った。今回のサレジオ霊性セミナーは、サレジオ家族教職員養成講座の教職員コーディネーターやSYM（サレジオ青年運動）の若者たちも参加し、長崎地区、大分地区でも開催された。

サレジオ会 二人のサレジオ会員の終生誓願

終生誓願を宣立した竹下尚克修道士（左）と薬師寺泰輔神学生

2018年3月19日、調布サレジオ神学院（東京都調布市）聖堂にて、サレジオ会日本管区長の山野内倫昭神父が司式するミサの中で、ガブリエル薬師寺泰輔神学生とヨセフ竹下尚克修道士が終生誓願を宣立し、生涯サレジオ会員として生きる誓いを立てた。薬師寺神学生は1988年大分県生まれ（臼杵教会出身）、竹下修道士は1989年宮崎県生まれ（都城教会出身）。2人とも四日市サレジオ志願院（三重県四日市市）を経て召命を実らせた。今後、薬師寺神学生は司祭を目指して神学の勉強を続け、竹下修道士はフィリピン北管区パラニャーケで修道士としての養成コースに進む。2人のためにお祈りください。

ドン・ボスコの風 Salesian Bulletin Japan No.20 April 2018

2018年4月30日発行（年2回4月・10月発行）

編集人　関谷　義樹
発行人　山野内　倫昭
発行所　カトリック・サレジオ修道会
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話：03-3353-8355　Fax：03-3353-7190
Eメール：dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作　ドン・ボスコ社
印刷所　日之出印刷株式会社

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© カトリック・サレジオ修道会 2018

「ドン・ボスコの風」について

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した"Bollettino Salesiano"の日本版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

本誌をご希望の方へ　ご寄付のお願い

本誌をご希望の方は、上記奥付の「ドン・ボスコの風」編集事務局までお申込みください。本誌は無料配布ですが、趣旨にご賛同くださる皆様のご支援をお願いします。下記の振込口座まで（または本誌綴じ込みの払込用紙にて）ご寄付いただいた方には次号より1部贈呈いたします。

郵便振替口座番号　00100-7-412947
加入者名　「ドン・ボスコの風」編集事務局

ドン・ボスコの風 Facebookページ
ドン・ボスコの風 で 検索
http://www.facebook.com/dbnokaze
ドン・ボスコの仲間たちとつながろう! いいね! をクリック!

Twitterフォローしてね!
ドン・ボスコくん
@DonBoscoSha フォローする

次号No.21は 2018年10月発行予定です。

「ドン・ボスコの風」バックナンバーは、サレジオ会ホームページ http://salesians.jp（トップページの「ライブラリー」→「ドン・ボスコの風」）でご覧いただけます。

編　集　後　記

サレジオ家族の教育現場では、子どもたちはみんな神様（あるいはマリア様）から呼ばれてここにやってきたと考えます。この考えを敷衍（ふえん）すると、その両親たちも子どもたちから引っ張られるかのように神様から招かれてそこにやってきたと言えるでしょう。親子で招かれた喜びを感じとりながら、共に学び、成長し、神様から託されたそれぞれの使命（ミッション）に気づいていくことができますように。　（S）

サレジオ情報の投稿をお待ちしています!

プレゼント付き!

本誌へのご意見やご感想、またサレジオ家族の学校・施設・活動グループ・教会・修道院での出来事の写真とコメントを、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・ご希望のプレゼント（下記A～C）を明記し、お送りください。

ご記入いただいた個人情報は賞品発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

応募締切 2018年8月31日
【Eメール】dbw@salesians.jp
【F A X】03-3353-7190（「ドン・ボスコの風」編集事務局宛）
【ハガキ】〒160-0011　東京都新宿区若葉1-22-12
サレジオ会日本管区本部　「ドン・ボスコの風」編集事務局

A　丸型ホーリー・ステッカー「ドン・ボスコ」

ドン・ボスコのお守りステッカー。イタリア語で「Proteggimi」（私を守りたまえ）と記され、ドン・ボスコは金色にふちどりされている。スマホ・手帳・車…など、いつも目にする物に貼って、ドン・ボスコの保護を願おう。

直径40mm　厚さ2mm　イタリア製　ドン・ボスコ社

B　『こころの教育者ドン・ボスコの「ローマからの手紙」』

"伝わる愛"を実践した教育者ドン・ボスコ。本誌の特集で紹介した彼のメッセージが凝縮された「ローマからの手紙」全文と、その教育法のエッセンスを紹介する「読み解きガイド」、関連する聖書の言葉を収載。サレジオ家族の必読書!

サレジオ会日本管区 編／浦田慎二郎 改訳・監修
四六判中綴じ　60頁　ドン・ボスコ社

C　『オラトリオの少年たち』

ドン・ボスコによる傑作「ドメニコ・サヴィオの生涯」を含む、オラトリオの3人の少年の伝記集。ドン・ボスコはどのように少年たちと関わり、少年たちはどのような気持ちで過ごしていたのか、生き生きとした表現で伝わってくる。

ジョヴァンニ・ボスコ 著／
アルド・ジラウド 解説・注釈／浦田慎二郎 監訳
A5判並製　380頁　ドン・ボスコ社

（A～Cはドン・ボスコ社にて取扱中）

SALESIAN PRESS DON BOSCO SHA
フェイスブックとインスタグラム、はじめました。
イエスの香りをお届けします。#ドンボスコ社

Salesian Family member interview
ファミリーメンバーインタビュー

今、私「〇〇」しています！

サレジオ会司祭
谷口 亮平 神父
Fr. Ryohei Taniguchi

フィリピンの国際神学院で「青少年司牧と語学を勉強」しています！

フィリピンの地元の子どもたちと教会で

なぜサレジオ会の神父に?

いつから神さまに呼ばれていたのだろうか?と考えると、今でも恐ろしく思います。なにせ幼児洗礼の時にいただいた洗礼名はヨハネ・ボスコなのですから。両親にはまだ、なぜこの霊名を選んだのか聞くに聞けずにいます。両親、特に父は教会で青年会活動をしていた当時、教会の手伝いに中津（大分県）のドン・ボスコ学園から来ていたサレジオ会の神父様方にお世話になっていたそうで、ドン・ボスコを知っていたことは理解できます。私自身が中津のサレジオに初めて行ったのは、シニア志願者として司牧体験に派遣された21歳の夏のことでした。

フィリピンの若手サレジオ会員と一緒に

最初に出会ったサレジオ会員は?

これは間違いなく古木眞理一（まりかず）神父（2016年6月逝去）です。父とは従兄弟（いとこ）同士で、大分のスタディーセンターで働いていた頃はよく実家に寄ってくれましたし、時々週末を利用して当時小学生だった私や親戚の友達をスタディーセンターに招待してくれました。佐賀関に釣りに行ったり、ジョイフル（ファミレス）でご飯を食べたりしたことが懐かしく思い出されます。そんなこんなでお世話になった古木神父から、小学6年の秋にサレジオ志願院に誘われました。その時は、通っていた小学校が全校生徒30人程度、同級生は8人でしたので、地元の中学校で新しい友達とクラブ活動することに憧れて、お断りしました。しかし中学3年の秋にも誘ってくれたので、1泊体験の誘いを断れず、「まぁこういう生活を3年間経験するのも悪くないか」と思い、「こんな適当な動機でいいのか」と思いながらも、古木神父が「それでもいいから」と言うので、四日市（三重県）のジュニア志願院に入りました。結局この志願院での生活がきっかけとなって、イエス様とドン・ボスコにはまってしまったので、古木神父の粘り勝ちだと思っています。一緒に志願院で生活したサレジオ会員の皆さんや仲間たちにも感謝しています。

未来の目標は?

合言葉は「聖なる、サレジオ会、司祭」。具体的にどのようなサレジオ会員に呼ばれているかはっきり見えていませんが、どこへ行ってもヴァルドッコのオラトリオ（ドン・ボスコが始めた当初の学び舎）のような、よい共同体をつくることがサレジアンの仕事だと思っています。なぜならこのサレジアンたちの雰囲気と環境が若者をひきつけ、育てていくのだと、体験を通して感じているからです。その中で福音宣教（キリストの愛を伝えること）ができれば最高ですが、ひとまず若者に自慢できる共同体を協力してつくって、その雰囲気を若者に広げていけたらと思います。年を取っても聴罪（ちょうざい）司祭や霊的同伴者として若者の役に立てるよう準備していきたいです。最終目標はズバリ、調布神学院に進級して以来ずっとお世話になっている師匠の金子賢之介神父越えです!

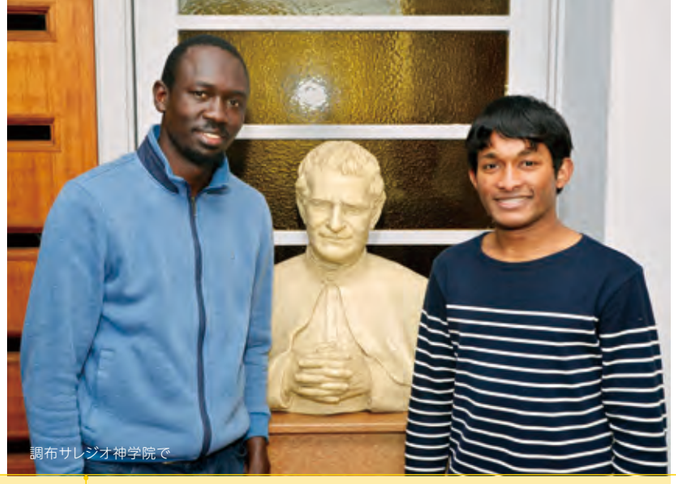
谷口亮平 たにぐち　りょうへい
Ryohei Taniguchi

1986年福岡県生まれ、新田原（しんでんばる）教会出身。三重県の四日市サレジオ志願院を経て、調布サレジオ神学院で司牧活動にたずさわりつつ上智大学神学部で学び、2017年4月司祭叙階。現在、フィリピン・パラニャーケのサレジオ会国際神学院で青少年司牧と語学を勉強中。現地での愛称は「タニ」「タニベアー」「ファザー・タマゴッチ」等。趣味は冒険、映画鑑賞、料理・お菓子作り。

Salesian Family member interview
ファミリーメンバーインタビュー

ようこそ日本へ！

2017年11月、日本に2人のサレジオ会宣教師が派遣された。2人とも若い神学生だ。現在、日本語学校で日本語を勉強しながら宣教の準備をしている2人のニューフェイスを紹介しよう。


調布サレジオ神学院で

ジェスウィン・マスタン 神学生
Jeswin Mastan

インドのムンバイ出身で、23歳です。家族は両親と3人きょうだいです。私が長男で、妹と弟がいます。父は漁業関係者で、母は専業主婦ですが父の手伝いをしています。

叔父（おじ）（父の弟）が神言会（しんげんかい）の司祭で、南アフリカの宣教師として働いています。その叔父の友人がサレジオ会司祭で、召命担当をしていました。14歳のときサレジオ会の若者のキャンプで小神学校に来ないかと誘われ、サレジオ会に入りました。

宣教師を志すきっかけとなったのは、ムンバイの神学院によく宣教師たちが来て、宣教地の話をしていたことです。最初は、自分が宣教師になるとは思っていませんでした。だんだん考えるようになり、サレジオ会宣教顧問のバサニエス神父が来たとき、話をし、その後手紙のやりとりをして自分の意志を伝えました。3か月後に宣教師となることが許可されました。

日本の26聖人の中に、インド人の聖ゴンザロ・ガルシアがいます。私と同じ出身で家から10分のところに彼の記念聖堂があります。日本に来ることが決まったとき、とてもつながりを感じました。

文章を書くのが好きなので、いつかチマッティ神父の本を英語に訳して紹介したいなと思っています。

音楽が大好きでキーボードを弾きます。スポーツはバレーボールとバドミントンが好きです。

ジョセフ=アブト・アマディ 神学生
Joseph Abuto Amadi

ケニア出身で、31歳です。家族は両親と8人きょうだいです。4人の兄弟、4人の姉妹で、私は7番目です。以前は家族でナイロビに住んでいましたが、両親は今、村に住んでいます。父は仕立て屋の仕事をしていますが、30年以上カテキスタ（教会の教師）としても働いています。母は教会のまかないの仕事をしています。叔父がイエスの使徒会の司祭です。

高校のとき、修道会に入りたいと思い、あるシスターから修道会を紹介する本をもらって読みました。そこにドン・ボスコが紹介されていて、ここに入りたいと。2009年、高校を卒業してからサレジオ会に入りました。両親は賛成してくれました。

最初から宣教師になりたいと思っていて、じつはサレジオ会は宣教会と思って入会しましたが、後で宣教師になるのは選択の一つだと知りました。そこで、すぐ目上に自分の意志を伝えました。目上からは、ナイロビで勉強して哲学の勉強が終わってからと言われました。そして7年経って、自分の思いが変わっていないことを目上に告げ、総長に手紙を書きました。

宣教師として日本に来ると決まったときは驚きました。貧しい国に行き、貧しいなかで若者たちを手助けすることを想像していましたから。日本は経済的に発展しています。けれど霊的、精神的な意味で、若者と共に歩む必要があると思います。そうできるようがんばっていきたいと思います。

スポーツは何でも好きで、サッカー、バスケットボール、卓球、ローラースケートもします。音楽の才能は神さまがくれませんでした（笑）。

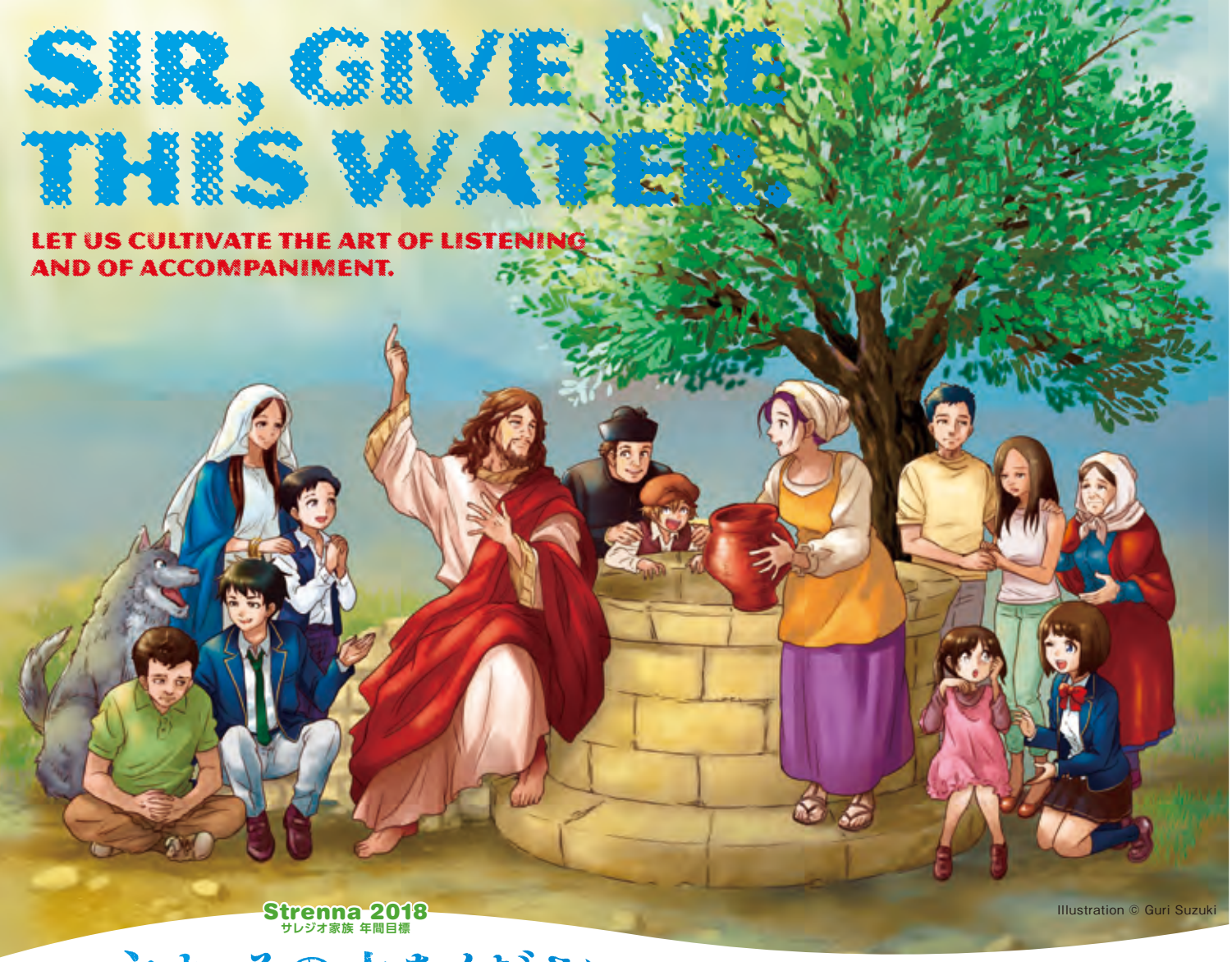


Illustration © Guri Suzuki

Strenna 2018
サレジオ家族 年間目標

主よ、その水をください

ヨハネによる福音書4章15節

耳を傾け、共に歩む生き方を深めよう

私たちは皆、自分の人生に深く触れる出会いを経験することがあります。あらゆる出会いは、耳を傾け、理解することから始まります。

イエスは、相手にとって善(よ)いことを望み、親しい絆(きずな)を築きます。相手を否定したり責めたりせず、おだやかに急がずに語りかけ、相手の興味を少しずつ目覚めさせます。今とは違う、もっと良い生き方をするための“水”の源泉をどこに見いだせるのか興味は大きくなり、とうとうサマリアの女性は言います。「主よ、その水をください!」

人生で何か美しいことをしたい、もっている最高のものをささげたいと望む若者が大勢います。同時に、不安の中で生きている若者や家庭、共に歩んでくれる人を必要とする人びとも大勢います。

私たちは彼らと共に歩まなければなりません。若者たちが心の奥深くで成長するよう、神ご自身が彼らのうちに働かれるように。そして介入するためではなく、証しを差し出すために、私たちが近くにいると若者が知るように。ドン・ボスコは、互いを知ることと信頼、友情に満ちた雰囲気をいつも大切にしました。

イエスと出会ったサマリアの女性は、私たちを招いてくれるでしょう。神から来る贈りものにいつも心を開いているように。互いに耳を傾け、共に歩むという人間らしい生き方の体験のうちに、成長し続けるようにと。

2017年10月　ブラジル訪問中のフェルナンデス総長 by ANS

サレジオ会総長
アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

ストレンナ2018ビデオメッセージより要約

ドン・ボスコの風
No.20 2018年4月 年2回発行 Salesian Bulletin Japan April 2018
発行／カトリック・サレジオ修道会「ドン・ボスコの風」編集事務局 〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12 TEL:03-3353-8355 FAX:03-3353-7190 Eメール:dbw@salesians.jp